

かしの木

第 49 号

2012年 3月号

発行 さくらまち高齢者福祉事業
かしの木編集委員会

〒184-0005

東京都小金井市桜町1-2-24

電話 042-381-1234

3.11 東日本大震災…1年が過ぎて…

『震災1年をむかえて』

桜町高齢者在宅サービスセンター
自衛消防隊本部長 藤井 律治

2011年3月11日から1年をむかえまして、改めてこの大震災でお亡くなりになりました多くの方々の尊い命を思い、追悼いたしますとともに、ご家族や知人の皆様や被災された皆様に、イエス様による心の癒しと平安が訪れますようお祈り申し上げます。

大川小学校など亡くなった子ども達と残された者の事を思う時…、かけがえのない沢山の大切な命が天に召されたことを思う時…、本当に言葉も無くなります。私たちの生活や考え方は、この3.11から様々なことが変わって来た様に思います。『戦後から災後へ』と日本人の考え方が変わってきたと多くの識者が語っています。そこでは、『家族』など自分の本当に大事なものや大切にしたいものは何なのか。生き方自体も変わった方も多かったです。

私たちは、この大きな犠牲と苦しみによって、やはり生き方自体を根本的に見直し真剣に生きなければならないと思うのです。

この首都圏でも大震災が予測されています。いつ発生するかわからない大震災にホームやセンターでも出来るだけ備えて対応しなければなりません。

まず、守らなければならないものは、3つあると考えています。1つ目は、ご利用者様の命と安全です。2つ目は、職員自身の命と安全。これには職員の家族も含まれています。震災で被災されるご利用者様と同時に、また職員とその家族も被災しています。特に介護の現場は、女性の活躍する職場ですから、母親や嫁の立場である職員も多いです。当然、職場としては、職員とその子ども達や要介護者等の家族の事も考えなければならない責任もあると考えます。ご利用者様の安全と職員・家族の安全の両面の視点が絶対必要です。それから3つ目は、地域の方々の命と安全です。ヨハネ会の各施設は地域社会の施設でもあります。地域の方々の命と安全にどう関わることができるかは大切な視点です。

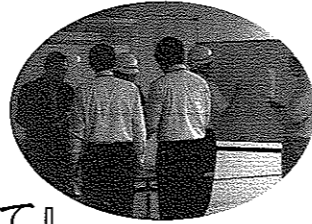
わが桜町聖ヨハネホームは重介護度の方を約100名抱える特養ホームです。これはヨハネ会高齢福祉部門全体で守らなければなりません。夜間帯に大震災が発生するとわずかに夜勤ワーカー6名で、約100名のご利用者様と自分の命と安全を守らなければなりません。ヨハネ会高齢福祉部門では、これからBCP(震災時とその直後でも継続してケアができる計画)を立案するところですが、いざ震災となるとセンターの職員もホームの応援に行くこととなります。またセンターのご利用者様で緊急にホームへ避難される方も出てくる可能性がありますし、職員総出で、在宅の心配な方々への安否確認や訪問支援等も検討される事になります。(p2につづく)

(→巻頭つづき)

最後に、広く地域の方々や社会の為には何をなすべきか。実際に3.11の時に、小金井市では、市長自ら帰宅困難者を一時救護所へ誘導されたようですが、ホームとセンターでは、何を成し得ることができるか…知恵を出さなければなりません。予想できない大震災に、私たちヨハネ会職員はこれからも真剣に取り組んでいくつもりですが、やはり私たちだけの力には限りがあるのも事実です。東日本大震災復興においては、実に多くのボランティアが全国各地から参集し活動されています。ボランティアの皆様を始め、ご利用者、ご家族の皆様と地域の皆様のご協力とご支援がぜひ必要となる事と思っておりますので、今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

(藤井 律治)

《桜町聖ヨハネホーム》

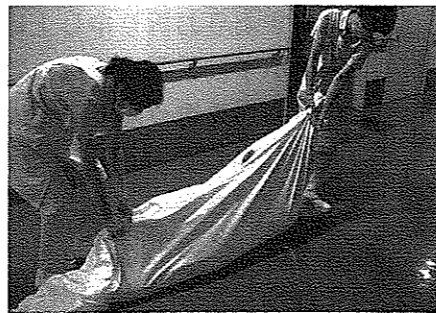


『合同震災訓練に参加して』

救護班 看護師 青木 真由美

昨年10月5日に行われた合同震災訓練に、初めて参加させていただきました。当日はホーム内の負傷者の状況を事務所に報告後、法人全体の本部となった桜町高齢者サービスセンターへ集合し、桜町病院、センターと合同で負傷者のトリアージ等の手順を確認しました。

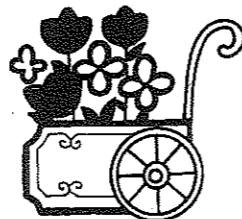
普段の業務ではあまり意識してはいたませんが、このような機会があると、マンパワーや設備など、法人としての心強さを感じました。と同時に、自分たちの持ち場はまず自分たちで守ることも大切だと思いました。当日は小雨混じりでしたが、災害は天気、季節、昼夜問わずに起きます。東日本大震災で、自らも被災されながら病院や施設の最前線で仕事を続けている医療、福祉職員の方々の姿には、本当に頭がさがりました。またボランティア活動に行かれた小田代元主任の報告を伺った時にも、他人事とは思えませんでした。実際に大地震が起きた時、看護師として、施設職員として、自分が何をしなければならないか、自覚を新たにしました。



ことばの花束

「人生の時」に備えて

聖書のコレヘトの言葉ですが、「何事にも時がある。生まれる時、死ぬ時、人生に時がある」又他の聖句は「目覚めていなさい。その日、その時を知らないのだから」と死を見つめてその「時」に備えて怠りがないように、現在の瞬時「今」を大切に生きよ、ということなのでしょう。人生のそれぞれの時期に特別な「時」があり、ギリシャ語でカイロス「時」は一回限りの絶対的な時のことで、時計で計れる時間でなく、真実に価値のある固有の時を指しています。昨年の東日本大震災の惨事は何を意味するか分かりませんが、いかなるものも神の手にあり偶然の結果ではないことを信じ、日常の喜びも悲しみもすべてを神の贈り物として戴き、「今日も良き日です。ありがとう」と神に感謝の日でありたい。(Sr 相松)



東日本大震災から学ぶ

3月11日に発生した東日本大震災から約1年を迎えようとしています。今回は、震災時のサービスの様子や、その後に行った対策などを紹介し、改めて震災がどう影響したのかを振り返ってみたいと考えました。まだまだ課題も多く、今後も引き続き対策を練っていく必要があります。今回の震災についてのアンケートで新たに防災への意識を高められればと思います。

◇質問1について

東日本大震災発生直後、どのように行動されましたか？

◇質問2について

東日本大震災後、震災の影響から改善した点や新たに始めた取り組みはありましたか？

★アンケート回答

《桜町ケアマネジメントセンター》

◇質問1について

発生直後、事務所にいたケアマネジャーは6名中4名。直後は併設の通所介護利用者の安全確保に協力。その後、担当している1人暮らしの利用者の自宅に安否確認の電話を入れました。電話がつながって安否が確認できたケースもあり、電話がつながらずに直接、訪問して安否確認を行ったケースもあります。

利用者宅訪問中に地震に遭ったケアマネジャーが1名。ヘルパー事業所と連絡をとりあって、ヘルパーにサービスを引き継ぎました。

他施設訪問中に地震に遭ったケアマネジャーが1名。施設から出て、予定していた高齢者世帯の利用者宅訪問しました。

市内でも地域や建物によって、揺れ方や地震の感じ方には違いがあったようです。

◇質問2について

8月より小金井市居宅介護支援事業者連絡会のケアマネジャー有志数名と地域包括支援センターの主任介護支援専門員で震災対応のための作業チームを作り、ケアマネジャーとして何が出来るか、を毎月集まって話し合っています。話し合った内容については事業所内で共有するようにしています。

震災等が発生したときに優先的に安否確認をする必要がある利用者をリストアップし、担当ケアマネジャーが不在でも他のケアマネジャーが対応できるようにしよう、というところまで話し合っています。今後は利用者やサービス事業者と、震災が起こったらどうするか、ということも話し合う機会をつくっていかうと考えています。

(通報連絡班 金丸 直子)

《小金井きた地域包括支援センター》

◇質問1について

地震発生時は、5名中4名の職員が出勤してお

り、訪問や事務所内での業務を行っていました。地震発生直後は、併設事業の利用者対応などの安全確保に協力しました。

揺れが収まった後は電話回線が非常につながりにくくなっており、個々の利用者に対して電話連絡を取ることが難しい状況だった為、支援対象者・見守り対象者の中で一人暮らしの高齢者を中心に、自宅環境や個々の生活状況を鑑みて安否確認が必要な対象者を抽出し直接訪問を実施。声かけや、注意を呼びかけるなどの対応を行いました。

◇質問2について

震災後から、包括支援センターでは被災地から小金井市内に避難してこられた方々のご相談を多く承りました。

突然の災害で生活の場を失い、住居・金銭面・体調管理などの物理的な問題を抱えている方、これからの生活に不安を抱え、災害時の慌しさの中で慣れない土地に移動して落ち着かない日々を過ごし精神的なサポートを必要とする方など、相談内容はそれぞれに異なり、被災地の介護保険事業所との連携や、小金井市、市内の病院や施設との連携を多く必要としました。

これを踏まえ、地域の横のつながりを改めて考えるテーマを地域のネットワーク会議で取り上げた他、市内の居宅介護支援事業所・サービス事業所それぞれと震災対応の特別作業チームの立ち上げに関わり、地域の事業所として取り組めることなどを定期的に検討しています。

(通報連絡班 松嶋 聡子)

《桜町高齢者在宅サービスセンター》

◇質問1について

その日は、1階と2階で活動中に地震発生、誰もが「しばらくしたら収まるだろう」と思ったはずですが、しかし、益々揺れが大きくなり、直ぐに職員は利用者様に寄り添い不安を和らげる声かけ等をして

した。あの数分間の恐怖心は、今でも決して忘れられないでしょう。

地震の揺れが収まり、まず安否確認と被害状況の確認、エレベーター停止以外は、大きな損傷はありませんでした。2階より3名の利用者様を抱きかかえて降ろし、少し遅れての送迎出発し、各車両無事に帰園しました。

帰園後、一人暮らしや心配な方々へ安否確認を含め、連絡及び直接お伺いしました。また、本町センターより協力依頼あり、男性職員3名が立ち寄り3階より担架にて2名の利用者様の移動を手助けしました。

◇質問2について

- ① 小型自家発電機のメンテナンス
- ② 棚やテレビなどの転倒防止の為、金具を設置
- ③ エレベーター停止時の移動手段として、ハンディ担架購入
- ④ 通信手段として無線機のメンテナンス
- ⑤ 防火設備の点検
- ⑥ 男性職員に消防設備及びボイラー設備の講習
(桜町センター自衛消防隊長 森田千積)

《本町高齢者在宅サービスセンター》

◇質問1について

東日本大震災発生時、まずは職員が落ち着いて動くことが必要でした。

火の元の確認やご利用者の不安を和らげるような声掛けを行う等、その場を動かずに様子を見ることで対応しました。特に認知症を患っている方への影響が心配でありましたが、皆で歌を歌う事で混乱を回避しておりました。揺れが収まり、安否確認と被害状況を確認、エレベーターの停止がわかり、各階から玄関への移動時に桜町センターへ応援要請を行いました。ご利用者の皆様が無事帰宅された後も、独居の方や高齢者世帯の方などの安否確認は必要でした。独居高齢者への配食事業を請け負っている本町センターは、特に安否確認が重要でありました。

◇質問2

- ① トランシーバーを新たに購入
- ② 棚やテレビ等の転倒防止器具設置
- ③ 防災緊急連絡網を更に強化
- ④ 防火設備の点検と使用法を再確認
- ⑤ 簡易担架など避難用具の使用法を再確認
(本町センター自衛消防副隊長 吉田貴夫)

ヨハネ会では毎年秋に5施設合同防災訓練で、震災を想定した訓練を実施しています。
ご利用者様や患者様を守り、またいかに地域の方々を支援できるか検討が始まっています。

今後の予定

— ヨハネホーム —

- 3月 ひな祭り
～4月 お花見
5月 お節句(菖蒲湯)

— 桜町センター —

- 3月 お花見(デイサービス)
～4月 さくら健康クラブ開始
(地域支援事業)
5月 介護技術講習会：口腔ケア
(地域支援事業)

— 本町センター —

- 3月 ひな祭り行事
梅見ドライブ
4月 桜お花見ドライブ

編集後記

東日本大震災後、大きな被害と悲しみから立ち上がる中、多くの方が「人との絆」の大切さを感じながら1年が経ちました。

「絆」：それは、一日にして得られるものではなく、日々のちょっとした関わりの積み重ねの結果なのだと思います。本当の「ひとりぼっち」を作らない為に何が出来るのか考え、行動に移すことを今後につなげていきたいものです。

(S・N)

- 編集委員長 中條 洋子 (桜町聖ヨハネホーム)
編集委員 中野紗綾香 (桜町センター)
編集委員 吉田 貴夫 (本町センター)

